

「立花宗茂と閼千代」NHK大河ドラマ招致応援

むねしげ ぎんちよ
「宗茂・閼千代」
ゆかりの地を巡る



立花宗茂公



閼千代姫

宗茂と闇千代ゆかりの地を巡る

①	宮永様居館跡、闇千代姫の生涯	1
②	御花	5
③	松濤園	6
④	立花家史料館	6
⑤	柳川城址	7
⑥	立花宗茂公	10
⑦	梅岳山福嚴寺	12
⑧	辻門	14
⑨	三忠苑	15
⑩	柳川古文書館	16
⑪	二ツ川と鋤崎土居	17
⑫	三柱神社	18
⑬	三柱神社欄干橋	21
⑭	寂性山良清寺	23
⑮	定慧山天叟寺	25
⑯	瑞松院	26
	主な年譜	27

宮永様居館跡（上宮永町本田）

初代柳川藩主立花宗茂たちばなむねしげの正室閨千代姫ぎんちよひめは、^{（1587）}天正十五年に宗茂が柳川領を与えられると、一時期城督も勤めた立花城（新宮町）から共に入城しました。八年後自ら城を離れ、城下の「宮永村」に居館を構え住んだため「宮永様」とも呼ばれました。別居の理由は定かではありませんが、宗茂の側室八千姫の存在に氣遣いされたとも。また閨千代をいただく勢力と、宗茂を中心とした勢力との対立を想定する説もあります。しかし宗茂出征時には城で寝泊まりし留守中を護ったなどの説もあります。

居館は絵図から見ると、掘割で囲まれており、城との往来は船を利用していたようです。居館の周りには警護の配下も住まいし、南の海側への備えとしても有効であったよう。

柳川城開城の際にも敵方は、閨千代が守るこの地を避けたとの説もありますようです。

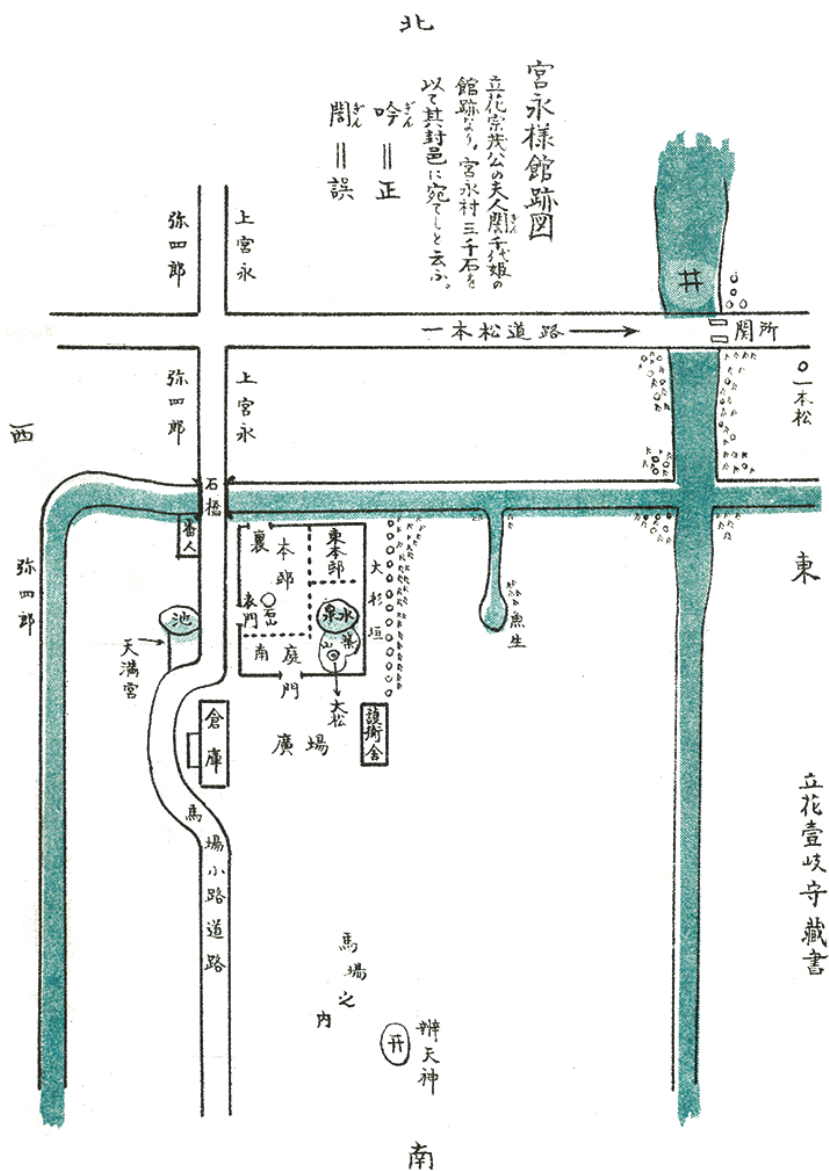


石碑と説明板は、
神社と地区公民館の
間にあります



居館跡遠景

宮永様居館跡図



閨千代姫の生涯

大友家重臣戸次道雪の一人娘として永祿十二年久留米市草野の間本で生まれた閨千代は、天正三年七歳にして立花城の城督となり「戦国女性」の鑑のような方でした。高橋紹運の長男で入婿の宗茂と十三歳で結婚。十九歳の時柳川へ入城して大名夫人として円満な時を過ごしたが、二十七歳の時、子宝に恵まれないが為に、宗茂に側室が出現。お家存続を願う宗茂を思い遣り側室との暮らしに配慮し、別居することに。三十二歳の時、「関ヶ原の戦い」で閨千代の諫めも空しく、恩ある豊臣方（西軍）に与し敗れたため、宗茂が領地も城も取り上げられ、加藤清正の庇護を受け夫とは別地玉名郡腹赤村（長洲町）に母と共に居住することになります。二年後この地で病いから亡くなりました。享年三十四歳、法名は「光照院殿泉譽良清大禪定尼」。宗茂の大名復帰を見届けないまま世を去りました。



玉名郡長州町腹赤にある
宮永様の供養塔(ぼたもちさん)

(1620)
元和六年に柳川へ再封された宗茂は、再封後先ず閨千代のため「良清寺」を建立し、その菩提を弔いました。墓は移されたものの、腹赤村には供養塔があり、その形から「ぼたもちさん」と呼ばれています。近代の改修で上部が逆様になったと言われています。

閨千代姫誕生の頃は、大友領国が大きく拡大し、かつ安定していた時期でしたが、立花城の城督であった頃は一転します。天正六年、日向耳川で、大友勢が南の勢力島津氏に大敗を喫すると、俄かに各地で謀反が相次ぎ、領国は一挙に瓦解

の方向へ向かいます。閨千代の父戸次道雪は高橋紹運ら他の諸将とともに、領国維持のため奔走することとなります。こうした中、城督閨千代の婿として迎えられ、立花の家督を高橋紹運の長男宗茂が継ぐことになりました。この時間千代は十三歳、宗茂は二歳上の十五歳で立花城の地固めを図りました。

道雪、紹運の死

しかし、父道雪は西の勢力龍造寺氏の支配下にあった柳川城を攻め落とせず、⁽¹⁵⁸⁵⁾天正十三年退いた北野の陣（久留米市）で病没します。宗茂の父高橋紹運も翌年岩屋城（太宰府市）にて島津勢への盾となり、壮烈な最期を遂げます。宗茂と閨千代が守る立花城は島津の攻勢に対し、二十日間近く籠城。

この間閨千代も決死の覚悟で城を護りました。程なく頼みの援軍である豊臣軍（先遺毛利勢）の九州入りで立花城は落城をぎりぎり免れ、宗

茂は秀吉のもとで九州平定に尽力しました。その功績により大友家から独立し、筑後柳川に大名として新たな領地を与えられました。

立花城から柳川城へ

閨千代は幼少の頃から慣れ親しんだ立花城に別れを告げ、⁽¹⁵⁸⁷⁾天正十五年六月柳川城入りを果たしました。入城後も豊臣秀吉の朝鮮出征などの戦いは続きますが、⁽¹⁵⁹⁴⁾文禄三年十月宗茂は二年前から続く謂ゆる「文禄の役」のさなか、正室閨千代を伴って上京し、秀吉に謁見。朝鮮出兵で手柄を褒めたたえられ、京都滞在用には聚楽第に広壮な一室を与えられ、二人揃っての幸せな時を過ごされました。

文禄の役以後の閨千代

しかしこの滞在中に天下人秀吉から、子宝に恵まれない宗茂に側室を紹介されました。閨千代は「どうしてくれよう・・・」と考え、結論が後の「別居」となるのでした。

御^お花^{はな}

藩主家の住まい御花畠

御花は旧柳川藩主立花家が日々暮らした屋敷です。藩主の住居は初め柳川城二ノ丸御殿にありましたが、第5代藩主貞俣公（さだよし）の時代に手狭になり、元文三年（1738）に現在地へ移りました。江戸時代の建物は残されていませんが、御花畠おはなばたけと呼ばれた屋敷の由来である大名庭園の一部が、今も東庭園に受け継がれています。立花家に伝わる絵図をみると、当時の庭園は池泉に張り出した座敷からの眺めを意識して造られ、池の周囲を回遊して楽しむこともできました。また春から秋にかけて季節ごとに多くの花々や紅葉で彩られていました。

伯爵家の住宅として

明治時代になると、御花畠は伯爵立花家の住

宅になりました。立花家14代当主寛治公（ともはる）は明治22年に東京から柳川へ帰郷し、明治39年（1906）から邸宅の本格的な造営に着手。

現在みられる御広間及び御居間とその座敷付庭園である松濤園しょうとうえん、また西洋館と洋風の前庭、正門などは、この時に造られました。西洋館及び御広間は接客の場であり、当主と家族は御広間の西側に続く御居間で暮らしていました。また西洋館西側の家政局と呼ばれる建物は、立花家の家事や財産管理などを行う事務所でした。



御花



松濤園しょうとうえん (立花氏庭園)たちばなしていえん

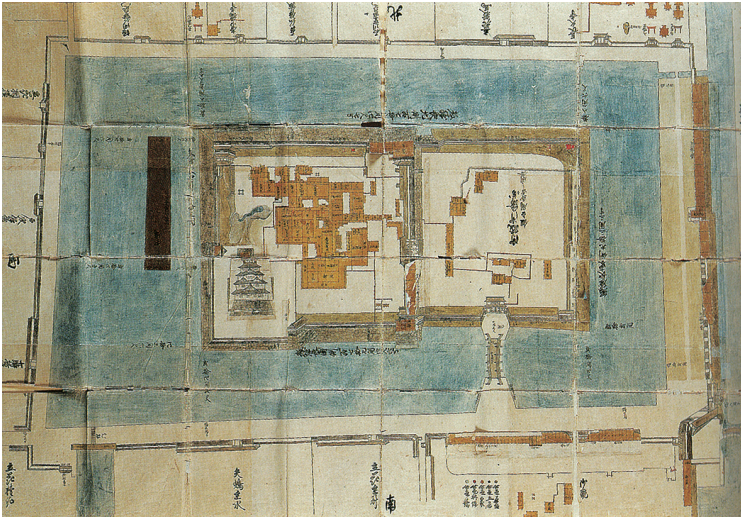
立花家14代当主寛治公の設計と伝えられる松濤園は、御広間及び御居間の座敷付の庭園です。城堀の水を引き入れた池に大小の島と岩礁がんしょうを置き周囲に約300本の松を配置した広大な池泉庭園ちせんていえんで、冬季には野鴨が飛来することでも知られています。御広間や松濤園の池

泉に能舞台が作られることもありました。松濤園及び御広間、西洋館の区域は昭和53年(1978)に国の名勝に指定。平成23年(2011)には東庭園の区域が追加され、御花全域が名勝になるとともに、文化財としての名称が松濤園から立花氏庭園に変更されました。

立花家史料館たちばなけしりようかん

立花家に伝来する美術工芸品約五〇〇〇点を収蔵。収蔵品の数々は宗茂や閼千代らが生きた証であり、歴史のリアルを感じさせてくれる貴重な史料です。

柳川城址



御城御絵図 (伝習館文庫)

「柳川」は鎌倉期からみえる地名ですが、「柳河」あるいは「梁川」などとも書きました。

ここには戦国期の国人蒲池治久が支城を築いていたと伝えられています。のち蒲池氏は二流に分かれ、それぞれに下蒲池・上蒲池と称されますが治久の孫にあたる下蒲池鑑盛に至って柳川に「築城」し、ここが下蒲池家の本拠地となります。鑑盛の子鎮連（鎮並とも書く）の時、龍造寺隆信の謀略によって下蒲池家は滅亡し、隆信は柳川城に鍋島信生（のちに直茂）、ついで龍造寺家晴をおきます。戦国時代の柳川城は度々の攻城戦に耐えた名城として知られ、家晴の守る柳川城を戸次道雪も攻めあぐねたといわれます。

立花宗茂時代の柳川城

豊臣秀吉の九州平定によって、南筑後三郡を与えられた立花宗茂は、この柳川に城地を定めて本格的な整備に乗り出すことになります。

文禄四年⁽¹⁵⁹⁵⁾にいわゆる「太閤検地」を終え、領国支配が安定化した段階、恐らくは翌五年ころから、柳川城の本格的な改修が開始されたのでしよう。当然これは慶長の役期にも継続し、天守閣の建造を含め朝鮮からの指示という事態に立ち至ったものと推察されます。

ちなみに三ノ丸から、本丸に隣接する二ノ丸に架設されていた通称欄干橋の擬宝珠には慶長⁽¹⁵⁹⁹⁾四年銘の陰刻が残っていました。

しかしながら立花宗茂による城郭・都市整備は改易によって頓挫し、その事業は田中吉政に引継がれます。

田中吉政の時代の柳川城

吉政は三河岡崎を領していましたが、岡崎を近世都市化するうえで大きな足跡を残した人物として知られています。近江出身の吉政は当時としてはもっとも先進的な技術者集団を抱えて

いたとも推察されます。その吉政は筑後一国の支配拠点と柳川に定め、入部間もない頃から積極的な城郭整備に着手したようです。すなわち吉政は慶長七年⁽¹⁶⁰²⁾国元の留守をまもる「三奉行」らに対し、城門の造営や天守台の建造から石垣の敷木調達、本丸・西ノ丸の作事、さらには掘割水際に設ける虎落にまでおよぶ細かな指示を書き送っており、五層の天守閣も吉政の代に成ったといわれています。ところでのちの立花氏時代の城絵図には主郭部として石垣で囲まれた本丸と、その東に隣接する二ノ丸が描かれており、吉政の指示にみえる「西ノ丸」が何を指すのか定かではありません。したがって、田中時代の柳川城が、そのまま次の立花時代に引継がれたどうかは、今後慎重に研究を積み重ねていく必要があるように思われます。

再び立花宗茂の時代の柳川城

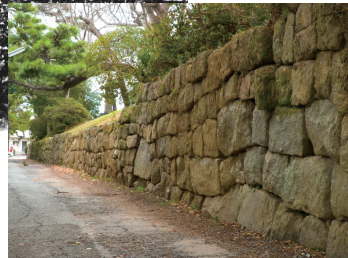
いずれにしろ、柳川城は元和六年末から⁽¹⁶²⁰⁾はふたたび立花氏の居城となりました。本丸、二ノ丸を囲むように三ノ丸が展開します。三ノ丸には重臣たちの屋敷が連なっていました⁽¹⁸⁷²⁾が、御蔵(東三ノ丸)や御厩(南三ノ丸)も設けられていました。こうして柳川城は立花氏の居城として、明治維新を迎えることとなりますが、明治5年⁽¹⁸⁷²⁾失火によって天守閣を含め、本丸・二ノ丸は消失してしまいます。

旧柳川城天守趾を中心として城跡の十分の一を公園として保存していたが、今では東側側面の石垣のみが当時の面影をわずかに残しています。

城跡は現在柳城中学校と柳川高校の敷地内にあり、本丸跡は「へそくり山」の愛称で親しまれ、石碑と案内板があります。



柳川城天守閣



柳川城址の石垣

立花宗茂公^{たちばなむねしげ}

立花宗茂は、大友氏（豊後：大分）の家臣の家に生まれました。宗茂が生まれたのは永禄十年で、独眼竜伊達政宗や日本一の兵と呼ばれた真田信繁（幸村）と同じ年。世はすでに織田信長や武田信玄、上杉謙信などが覇を競いあつていた最中であり、宗茂が活躍するころには豊臣秀吉が台頭し、天下が固まりつつありました。

生き馬の目を抜くような戦国時代において、損得勘定で動かず、義を重んじた稀有な人物でした。誰に対しても驕ることなく接し、部下はもちろんのこと、他家の武将からの人望も厚かったといわれています。

天下人・豊臣秀吉をして「剛勇鎮西一」「東の本田忠勝、西の立花宗茂」と言わしめるほど戦上手だったといわれています。また五大老・小

早川隆景は「立花家の軍三千は他家の一万に匹敵する」と評価し、肥後熊本城主・加藤清正も「日本軍第一の勇将」と絶賛したといっています。

慶長三年秀吉が亡くなった後、慶長五年、豊臣家への恩義から関ヶ原の戦いでは西軍に属し、結果敗軍の将として浪人生活を送る事に。

しかし、その人望と才覚は徳川家康や江戸幕府二代将軍徳川秀忠からも高く評価され、江戸時代になると小藩ながら大名に復帰。元和六年には柳川藩主となり、関ヶ原の戦いで敗れ、改易された大名のなかでは唯一、旧領復帰を果たしました。

義に生きた武将宗茂

戸次道雪や宗茂に仕え、立花家随一の切れ者といわれた薦野増時。増時は関ヶ原の戦いにおいても、西軍に勝ち目無し！と読み、東軍にくよう進言します。また、徳川家康も宗茂の実

力を高く買っており、法外な恩賞をちらつかせて東軍に誘いました。しかし、宗茂は断固として東軍につくことを拒みます。豊後大友氏の一家臣であつた立花家を独立大名に取り立てたのは、ほかでもない豊臣秀吉。宗茂は「秀吉公の恩義を忘れて東軍につくことなどありえない」「戦の勝ち負けではない」と西軍についてのです。人格者で忠義に厚いとされた宗茂らしい逸話です。

仇敵との友情

関ヶ原の戦いに敗れて柳川に戻る道中、宗茂は同じ西軍だつた島津義弘と出くわします。この時の島津軍は日本史上に残る凄絶な退却戦の末、残る兵はわずか。まさに満身創痍でした。島津氏といえば、父・高橋紹運を死なせた憎き相手。家臣らは「今こそ仇を討つ時！」といきり立ちます。しかし、宗茂は「敗軍を打つなど

武士のやる事ではない」と一喝。むしろ、西軍の仲間として護衛を申し出たといいます。その後、国許に戻つた義弘は、この恩に報いようと東軍に攻められる柳川に援軍を送ります。宗茂の清廉さは、仇敵との友情をも可能にしたものでした。

梅岳山福厳寺ばいがくざんふくごんじ



福厳寺は柳川藩主立花家の菩提寺です。天正十五年(1587)に柳川城に入った立花宗茂は岳父戸次道雪(鑑連、閨千代姫の実父)の菩提寺、曹洞宗梅岳寺(鑑連、閨千代姫の実父)を柳川城下に移しました。田中家の時代には廃絶を余儀なくされたようですが、元和六年(1620)、柳川に再封された立花宗茂により復興されました。(1669)寛文九年、二代藩主忠茂が改宗したのを受け、三代藩主鑑虎は梅岳寺を臨済宗黄檗派に改め、寺名を梅岳山福厳寺とします。現在の伽藍は東に山門、北に本堂、南に天王殿、西に鐘鼓楼と開山堂が配置されています。このうち天王殿は、全国的にも数少なく貴重です。

本堂のうしろには、歴代柳川藩主の墓所である御霊屋(おたまや)が置かれ、また境内西側は藩士の墓所が広がります。また、芥川賞作家の長谷健(旧姓堤、本名藤田正俊)、直木賞作家の檀一雄、そして層雲派(自由律俳句)の俳人木村緑平(本名木村好栄)の墓もあります。

御^お霊^{たま}屋^や

本堂のうしろにあります。

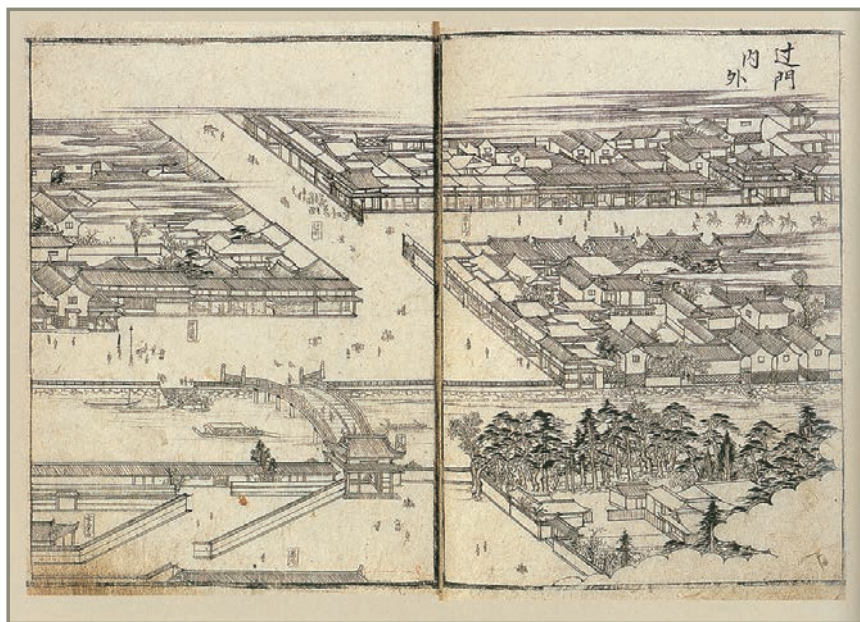
歴代の藩主の墓所ですが、墓塔を覆っている建物がコの字状に整然となった様は、これまた封建制度の秩序に満ちた建築空間を実感できる場所を提供しています。



立花宗茂公の墓

辻^{つじ}門^{もん} (辻御門^{つじごもん})

旧柳川城下町の柳河から御家中と呼ばれた城内に入るためには、長さ8間の橋で外堀を渡り「辻門」を通る必要がありました。江戸後期の文政年間に著された『柳川明証図会』では、辻門は「此の番所にてあらためて旅人を入れることを許さず」と紹介されています。寛政年間の絵図では門の西に番所が、門を通り城内に入った突き当りに正面に目付役所がそれぞれ描かれており、通行人をあらためたことがわかります。現地には今も辻門橋と名付けられた橋が架けられ、橋の南西隅には「辻門趾」の石柱が建てられています。なお、大川市小保の浄福寺山門は辻門を移築したものとして伝承されています。3間1戸の薬医門で、切妻造棧瓦葺。建築年代は19世紀中期に比定されています。



辻門内外『柳河明証図会』



浄福寺山門（大川市小保）

三忠苑

安東省菴^{せいあん}は、立花宗茂、忠茂、鑑虎^{あきとら}の三代に仕え、また八代の子孫にその道を伝えて、柳川藩儒学の伝統を築きました。

三忠苑は、柳川藩最初の藩儒安東省菴先生と、その師である朱舜水^{しゆしゆんすい}、また朱舜水を賓師として招いた徳川光圀の三人の出会いを安東省菴の名著『三忠伝』になぞらえて、名付けたものです。苑内の三つの巨石は、省菴先生と朱舜水、徳川光圀、砂敷は東シナ海、灯籠は長崎、そして船形石は朱舜水の渡来を表現したものです。

またその奥の楷^{かい}の木は、会津若松日新館^{びしんくわん}が中国の孔子廟^{びよう}に植えられていた楷の木の種子を育⁽¹⁹⁸⁹⁾て、平成元年に寄贈されたもので、秋には見事に紅葉します。

三忠苑の奥には、安東省菴先生から藩校伝習

館の初代教授となった節菴まで六代にわたる子孫とその家族の墓のほか、師を慕う門人たちの墓が寄り添うように建ち並んでいます。

墓地がそっくり安東家の家塾になったようで、死後まで強いきずなで結ばれた美しい師弟愛が訪れる人々に感動を誘います。



安東省菴の墓

柳川古文書館

(九州歴史資料館の分館)

筑後地方には、国指定重要文化財「五条家文書」や福岡県指定文化財「伝習館文庫」をはじめとして、多数の古文書等の所在が確認されています。

しかしながら、これら多数の古文書などの保存・管理は必ずしも良好な状態とは言い得ない面も見受けられ、個人所有のものの中には消失または、散逸の危険にさらされているものもあります。

当館は、これら歴史を生のまま語る貴重な古文書等の史料を収集、保存するとともに、県民の方々に理解しやすいように整理して、郷土学習など生涯教育の場として活用される施設です。

【施設の概要】

設置 福岡県教育委員会(九州歴史資料館分館)

管理 柳川市教育委員会(生涯学習課)

【主な収蔵資料】

① 大友家文書・立花文書・伝習館文庫・

柳川藩立花家文書

② 鷹尾神社文書 ③ 柳川藩士資料



柳川古文書館と鋤崎土居

ふたかわ すきざきどい 二ツ川と鋤崎土居

二ツ川

二ツ川は、矢部川水系沖端川の水を柳川城下町に供給するために整備された水路です。また、農業用水路として城下町よりさらに下流の農村地域を支える重要な役割があります。城下町に面した川幅は江戸時代には約22間（約40メートル）もあり、城下町側の西岸には、防衛のために堤防が築されました。

鋤崎土居

二ツ川の堤防のうち、城下町の東の入口である瀬高御門より北側の延長400間（約720メートル）、幅18尺（5・4メートル）に及ぶ堤防は、鋤崎土居と呼ばれています。堤防には榎、棕、その他の雑木や竹、ススキが生い茂り、堤防を強固にするとともに、外部から城下町の姿

を隠す役割を持っていました。特に、城下町に近づくに従って天守閣が土居の陰に隠れるため、敵が攻撃目標を見失う「遠見遮断の役」を果たしました。

また、鋤崎土居には城内に水を引き込むための水門が3カ所あり、城下町全域に効率良く水を行き渡らせるとともに、敵に攻められた際は水門を閉じることで城下町東側の土地に水が溢れ湿地帯となり、城下全域を水城として防衛する仕組みであったといえます。

現在、役割を終えた土居は切り下げられ、道路や宅地として使用されています。

今も残る二ツ川の土居

瀬高御門より南の二ツ川下流方向に延びる堤防は、田中吉政菩提寺真勝寺の裏手にあたることから、真勝寺土居と呼ばれています。また、さらに下流には江戸時代の堤防の一部が残されており、柳川城外曲輪土居と呼ばれています。

三柱神社 みはしらじんじや

柳川城東北に位置し祭神は立花道雪、立花宗

茂、闇千代姫。

文政八年九月造営開始。維新後明治十年(1877)県社

となる。

文政九年棟梁宋吉兵エ(1826)（柳川市常盤町）が建

てたもので日光東照宮に模していました。

天明四年(1784)、長久寺に祀られていた道雪と、文

政三年日吉神社近くの仮宮に祀られた宗茂・闇

千代を合祀する形で文政八年(1825)9代目柳川藩主立

花鑑賢の時に創建された。平成17年(2005)6月、拝殿、

回廊、楼門を火災により消失し本殿のみが免れ

ました。



三柱神社拝殿（消失前）



三柱神社楼門（消失前）

祭神 立花道雪

筑前立花山の城主で筑前、筑後に於ける戦国の武将。

(1585)
天正十三年、三井郡北野に歿す。



祭神 立花宗茂

立花道雪の養子。柳川城十三万石の初代藩主。
(1600) 慶長五年、関ヶ原の役に失脚、
(1620) 元和六年、再度柳川城主となる。十萬九千石。
(1642) 寛永十九年、歿す。



宗茂再封後、柳川西魚屋町に良清寺を建て
改葬する。

絵像三幅は三柱神社の什物。



祭神 閻千代姫

道雪の娘。宗茂を入婿とする。
(1602)
慶長七年十月十七日、玉名郡腹赤村にて歿す。

三柱神社欄干橋みはしらじんじやらんかんばし



欄干橋 (新)



欄干橋 (旧)

この橋は元、木造の橋で柳川城二の丸から三の丸に渡る橋を移したものとされます。二の丸出口の太鼓門（昼と夜とに時刻を知らせる）にかかる橋、あるいは太鼓の形に似ていることから別名太鼓橋と呼ばれています。

青銅の擬宝珠左右十四個すべてに製作者の名が刻まれています。

九州筑後国山門郡柳河之橋也

慶長四己亥八月吉日

作者瀬高上ノ庄之住

平井惣衛尉平成貞小工十三人

重八十九斤

擬宝珠は大東亜戦争のとき、省耕園に四個を保管し他は全て供出され、昭和57年⁽¹⁹⁸²⁾欄干橋が改築されたときこれを使用しました。

「おにぎえ」と「どろつくどん」

三柱神社のお祭りは、春の桜祭りと特に秋のおにぎえが有名です。

おにぎえとは、三柱神社の秋の大祭のことで、旧柳河藩領域で最大の祭りです。その由来は、「大賑わい」（あるいは「お賑わい」）から来ています。

このおにぎえの中日の神幸行列で列の先頭を進む山鉾を「ドロツクドン」と言います。このドロツクドンは、文政九年¹⁸²⁶三柱神社の遷宮式の際、保加町の人たちが江戸の葛西囃子と京都の祇園山鉾を参考にして奉納して、好評を博したものとわれています。以来、おにぎえの時に奉納されるようになり、現在では保加町のほか、上町、蟹町、京町三丁目が一年交代で出しています。

どろつくどんは、福岡県の無形民俗文化財に指定されています。



おにぎえ



どろつくどん

寂性山良清寺じやくしょうざんりようせいじ (立花闇千代菩提寺)

良清寺は、柳川藩祖の立花宗茂公の正室である闇千代姫さんちよの菩提を弔うために、元和七年(1621)に建立された寺です。寺名は、闇千代姫の戒名の「光照院殿泉譽良清大禪定尼」に由来します。

闇千代姫が亡くなったのは熊本県長洲町腹赤村で、現在も供養塔が残っていますが、三十三回忌にあたる寛永十一年(1634)に本寺に改葬されました。本寺は初め摂取山という山号でしたが、享保十年(1725)に、二代藩主忠茂五男貞晟「寂性院殿深譽幽廣湛玄大居士」追善のため、寂性山と改号されました。

立花家墓所《御霊屋》には、寂性院殿の娘であり、五代藩主貞俣の正室松子「珂月院殿浄譽遊岸光澄大姉」も合祀されています。

闇千代姫(1569)(永祿十二年八月十三日)慶長七年十月十七日(1602)は、大友氏の有力家臣であった

立花道雪(戸次鑑連)(1575)の娘として誕生しました。

天正三年、道雪は、大友宗麟の許しを得て闇千代姫に立花家の家督を譲ります。日本の歴史に於いても稀な女城主の誕生です。

天正九年、同じく大友家有力家臣高橋紹運の嫡男統虎(後の宗茂)を婿に迎えます。秀吉の九州国割りによって、宗茂は筑後国柳河城主となり、柳河に移ります。

慶長五年(1600)、「関ヶ原の戦い」に於いて立花家は、豊臣家に忠義を尽くし西軍につくが、敗戦。後、宗茂と闇千代姫は加藤清正に庇護される身となりました。

肥後で宗茂は玉名郡の高瀬に居住し、闇千代姫は母宝樹院と共に同郷・腹赤村に居住する事となります。夫宗茂はその後、清正の赦しを得て上方に上ることになりますが、姫は肥後に留まりました。そして、慶長七年十月十七日(1602)、闇千代姫逝去。享年三十四歳であったと云われています。

「光照院殿泉譽良清大姉」

姫の死去した翌年慶長八年、宗茂は徳川家に召抱えられます。そして元和六年遂に柳河城主として返り咲きを果たしました。二十年振りに柳河に戻った宗茂は、閨千代姫の為「良清寺」を建立して、その菩提をねんごろに弔いました。

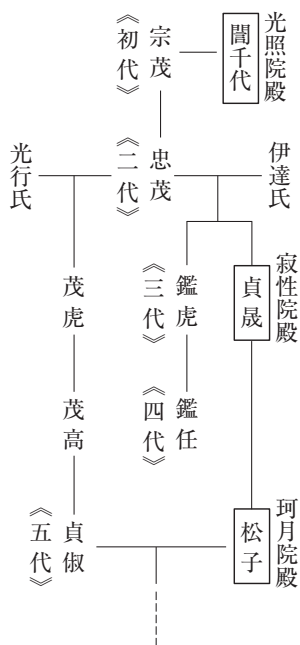


閨千代姫の肖像画(柳川市良清寺所蔵)



良清寺立花家墓所【御霊屋】

【立花家系譜】



【御霊屋】

立花彈正貞晟公

◎寂性院殿深譽幽廣湛玄大居士

享保五庚子年十月二十四日歿

前立花飛騨守源宗茂公婦人

◎光照院殿泉譽良清大姉靈儀

慶長七壬寅年十月十七日

戸次丹後守源鑑連公長女閨千代

寂性院殿嫡女 城主貞椒公室

◎珂月院殿浄譽遊岸光澄大姉

享保十八癸丑年九月十四日歿

定慧山天叟寺

柳川市鍛冶屋町にある。もと曹洞宗桂林寺。

元和年中（1615～1624）開基。

寛永四年、忠茂は外祖父高橋紹運の位牌を安置し久留米、少林寺の俊領を招き中興の開山とし、桂林寺改め定慧山天叟寺としました。

高橋主膳入道紹運（立花宗茂の実父）

本姓 吉弘 鎮理、高橋 鎮種

その他の呼び名／千寿丸・弥七郎・

吉弘 鎮理・高橋 鎮種・三河守（三河入道）

主膳兵衛尉（主膳兵衛）・主膳入道

号 紹運（紹雲）

（大宰府ではしょううん、他方ではじょううん）

生没年 1548～1586

誕生 天文十七年（1548）九月二十四日

豊後国・東国東郡都甲莊・長岩屋の笥城にて誕生

法名 天叟寺殿性海紹運大居士

菩提寺 天叟寺（柳川市）、紹運寺（大牟田市）

西正寺（太宰府市神社）、三笠神社（大牟田市）
祭神（紹運・宋雲尼・統增）

持ち城 本城：筑前国・宝満城

支城：岩屋・龍ヶ城、升形・米の山

役職 筑前国・宝満・岩屋城督

父 吉弘 鑑理 大友家・三家老（豊州三老）

の一人

母 大友義鑑の娘（？）

兄弟 兄：吉弘 加兵衛、鎮信、他に二女あり、内一人は大友義統の妻（菊子）

死 去 天正十四年七月二十七日

筑前国、岩屋城にて自害、三十九歳

紹運公の墓



岩屋城跡（太宰府市）



こうだいさんずいしやういん
光台山瑞松院（浄土宗）

柳川を治めていた蒲池家を滅ぼした龍造寺は、当時柳川城に鍋島直茂（後の佐賀鍋島藩藩祖）を派遣していました。直茂は夭逝した娘を弔うため本小路に本覺寺を建てました。

後に秀吉により柳川城を拝領した宗茂はこのお寺を現在地に移しました。

継室であった八千姫（1624年没）がこの寺に葬られ寺名を瑞松院に改められました。八千姫の実家である矢島家の菩提寺でもあります。



八千姫墓

（一般公開はしていません）

主 な 年 譜

年次	西暦	宗茂年齢	内 容
永禄	10	1567	11月18日 立花宗茂 出生。豊後国都甲荘長岩屋にあった笥城の吉弘館で生まれる。 (父吉弘重種、後の高橋紹運19歳)
	12	1569	3月8日 閻千代 出生。筑後の耳納山麓、草野の間本城で生まれる。名前を決めるにあたり肥前の僧、僧吟に頼む。(父、戸次鑑連57歳)
元亀	2	1571	5月 鑑連 、大友宗麟の命で筑前国の立花城督に任命。それに伴い3歳の閻千代は父、鑑連に連れられ筑後国の赤司城より移城。立花城へ入る。 戸次鑑連から立花道雪となる。(59歳)
天正	3	1575	9月5日閻千代7歳、立花城督となる。(道雪63歳)
	6	1578	12月日向の国(現宮崎県日向市)耳川の合戦。大友氏が南からの島津勢に大敗を喫す。
	9	1581	15月8日。立花・高橋両家の養子縁組が成立。婚儀18日。左近将監統虎、 立花家へ婿入り 。 統虎15歳、閻千代13歳、道雪69歳、紹運34歳。
	13	1585	19月6日。道雪、陣中発病。9月11日没、73歳。高良山の北麓北野村(現、三井郡北野町)にて病死。
	14	1586	20月高橋紹運、岩屋城(現太宰府市)にて玉碎(39歳)
	15	1587	21月9日統虎、島津追討の功で筑後4郡13万2千石余(内弟統増「直次」の三池郡1万8千石余を含む)を賜り大名として柳川へ移城となる。 統虎、宗茂と改名。
	16	1588	22月6日15日、閻千代と立花家中は柳川へ向けて出立。6月17日、柳河城へ入城。
文禄	1	1592	26月朝鮮の役。宗茂は2千3百50人の兵を率いて渡海。3月宗茂、肥前名護屋着船。18日釜山に上陸。

年 次		西暦	宗茂 年齢	内 容
文禄	3	1594	28	6月宗茂は秀吉の命により帰国。10月伏見の秀吉のもとに闇千代を伴い挨拶上洛。聚楽第に部屋を与えられ短い期間を二人で過ごす。宗茂、八千姫と出遭う。闇千代は柳河城郊外の宮永村に作った館に住み「 宮永様 」と呼ばれる。 (1599説あり)(闇千代26歳)
慶長	2	1597	31	再び征韓の役起こる。宗茂、2千6百7人を率いて出征する。翌年、秀吉が世を去ると引き上げた。
	3	1598	32	12月。宗茂、将兵と共に柳川に帰還32歳。
	5	1600	34	関ヶ原の戦いがおこると宗茂西軍へ。闇千代、東軍へつくよう説得するが叶わず。11月11日柳川城開城。 宗茂は肥後高瀬に、闇千代は腹赤村にお預け32歳。
	6	1601	35	田中吉政柳河入城
	7	1602	36	3月。宗茂、京都に旅する。(大名復帰のための運動) 夏、闇千代病症に臥し10月17日没 34歳。 法名:光照院殿泉譽良清大禅定尼
	11	1606	40	宗茂奥州棚倉に1万石賜る。
元和	2	1616	50	闇千代の母、宝樹院は肥後で死去。
	6	1620	54	宗茂、再び柳川に返り咲くと良清寺を建て闇千代の菩提を弔う。
	10	1624	58	後室八千姫死去(瑞松院)
寛永	10	1633	67	側室長泉院死去
	19	1642	76	宗茂、江戸下谷の柳川藩邸にて没す。 江戸下谷広徳寺に埋葬 大円院松蔭宗茂大居士。 大正12年関東大震災後遺骨が福厳寺に改葬される。
天保	6	1835		熊本県腹赤、ぼたもちさん建立。

参 考 文 献

柳川市史

柳川市史編集委員会編 柳川市史別編「新柳川明証図会」 柳川市
柳川市史編集委員会編 柳川市史別編「図説立花家記」 柳川市

地誌・郷土史

渡辺村男「旧柳川藩志」柳川・山門・三池教育会
渡辺村男「宮永様一代記」

パンフレット

「立花宗茂と閨千代ゆかりの地を巡る」福岡県

ホームページ

柳川市ホームページ <https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp>
宗茂と閨千代 NHK招致活動サイト <https://muneshige-taiga.jp>

「無双の花」

葉室 麟 著

「名に恥ずるなく己に恥ずるなく」

黒田如泉 著

「まりしてん閨千代姫」

山本兼一 著

「宗茂・闇千代」
ゆかりの地を巡る



柳川市市民協働のまちづくり事業
「宗茂・闇千代」ゆかりの地を巡る
二訂版

令和3年11月21日 1刷発行

令和4年11月23日 2刷発行

発行 まちづくりネットワーク柳川

本誌掲載の写真、記事の無断転載複写を禁じます。